

# L'Echange

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

FREEPAPER 第6号 2018年3月発行

L'Echangeは、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

巻頭特集 ● 生物学者・村上貴弘氏  
生活 ● フランスの幼稚園と小学校  
都市 ● Faux la Montagne 訪問記  
文化 ● 日仏のインディゴ  
風景 ● クロード・ロランとピクチャレスク  
食 ● じゃがいも

Special

Vie

Urban

Culture

Scène

Cuisine

1

L' Echange

巻頭  
特集

第 6 号

## 生物学者・村上貴弘氏 Biologiste Takahiro Murakami

フランスと昆虫学



生物学者・村上貴弘氏（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター・准教授）



先生に見せていただいた昆虫学に関する文献

2017年に、日本におけるヒアリ騒動で一躍脚光を浴びるようになった、アリを専門とする生物学者・村上貴弘氏。今回の巻頭特集では、村上氏にフランスと昆虫学の関連から若者へのメッセージに至るまでを伺いました。

ファーブル昆虫記がきっかけで、フランスに興味を持つ方が多いです。彼の出生地でとられたブドウのワインも一部で人気があります。

ジャン＝アンリ・カジミール・ファーブル（1823-1915）は、フンコロガシやハチの巣づくりなど、地道な昆虫の観察から積み上げ型の研究を行った研究者として知られています。昆虫記は、1879 - 1907年に出版され、全10巻に及び、昆虫の詳細な行動・生態を記述しています。当時は、虫眼鏡を当てながら観察していたため、ファーブルの右目は虫眼鏡の形に変形していました。また、当時の大学教員は貴族しかなれませんでした。ファーブルは貧しいので、教員になれず助手をしていました。その時はドイツで染料の開発をしていました。お金になるためです。ファーブルの発見した効率の良い染料の抽出方法は、実用化する資金がなく、目が出ませんでした。これはドイツで同様の方法が発見される数年前でした。

このように、ファーブルは、昆虫記を出す56歳まで日の当たらない研究者人生を送っていました。ファーブルは、弟子の勧めで昆虫記を書きました。

よく知られているものは、フンコロガシの生態やアシナガバチの巣作り、タマムシの採餌などです。実は、第二次大戦の日本人兵士も昆虫記を携帯していたことが多かったと言われています。それぐらいファーブルは日本人に親しまれています。

ファーブルのキーワードは、多様性や変な行動と言えます。これは、日本人の世界観に合います。当時から、このような多様性を認める文化背景が面白いと思います。同時期のイギリスのダーウィン（1809-1882）は、1859年に「On the Origin of Species（種の起源）」を執筆していますが、理論派で、適者生存や自然選択といった研究者向きの世界観を持っています。彼は、全てキリスト教的世界観で自然を見ていました。ダーウィン以前には、人々は

神が生物を創り、ノアの箱舟で生き残った生物のみが残っていると思い、世界は変化しないと思っていました。1859年以降、生物は「進化」しながら、多様な生態系を作る説に変わりました。この説は、キリスト教の教会から批判を浴びました。猿にダーウィンの顔がついている風刺画は有名です。

ダーウィンのキーワードの一つ、適者生存とは、その環境に適した個体がより多く子供を残すことです。もう一つの自然選択は、その環境に適した形質は、長い時間世代をかけて自然に選択されることです。それを積み重ねるとサルとニンゲンが枝分かれできます。なお、未だにテキサス州では進化論を教えるはいけないことになっています。キリスト教的世界観では、ニンゲンは神の子であるからです。

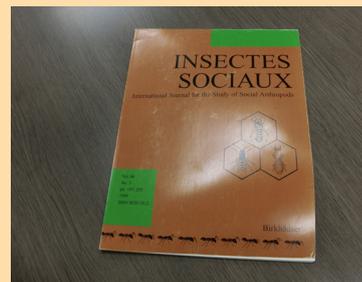
このようなフランスとイギリスの違いが面白いと思います。フランスは個が強く、イギリスは島国であるため、規律を好みます。この両者は好対照で、世界中で分家のように2つの流派を守っています。日本人は二者について必ず学んでいると言っても良いでしょう。ダーウィンは高校で勉強し、ファーブルは小学校から読みます。

フランスには、Insectes Sociaux（社会性昆虫）という世界で一番古い社会性昆虫に関する雑誌があります。フランスは伝統的に社会性昆虫研究が盛んであり、このような雑誌は、あとアメリカにしかありません。個が強いのに社会性昆虫研究が強いことは面白い点です。Insectes Sociauxは、1954年から現在までフランス語と英語で出版されています。この雑誌に論文がのるとそれなりの評価が認められます。社会性昆虫研究が盛んな国として、他はドイツ・スイス・ベルギー・スウェーデンなどがあります。Insectes Sociauxには、アジアでは唯一、日本が戦前から研究論文を載せていました。その中には、南方熊楠も含まれます。日本との交流は深く、日本の昆虫学者・坂上昭一先生特集をした刊もあります。

私は、パリ・ノルテ校にポスドクとして渡仏しようと計画していたことがあります。その時の研究のテーマは、ウマアリ（馬蟻）の繁殖戦略です。ウマアリはフランスやスペインなどヨーロッパにしかいないアリです。アリに関する研究の詳しい内容は、坂本洋典・東正剛・村上貴弘（2015）「アリの社会」東海大学出版部をご参照いただきたいと思いますが、ベーシックなアリの繁殖戦略は、女王アリが倍数体の染色体を2nで持ち、それが減数分裂してn卵子になります。卵子は受精がない場合雄アリになります。雄アリは単数体であり、減数分裂せずn精子を持ちます。働きアリも雌で、女王アリに成長するか否かはエサの量で変わります。ウマアリの場合は、受精して2nになったものは全て働きアリになります。また、普通は単為生殖をすると雄しか産めないのですが、ここが何故かはわかりませんが、受精していないのに女王から女王が生まれます。つまり、先ほどの減数分裂をスキップして2nの卵原細胞から2nの卵子ができ、100パーセントお母さんと同じ女王のクローンが生まれます。これだけでも普通のアリと全く違いますが、更にややこしいのがオスの生まれ方です。単為生殖で女王が生まれてしまうので、オスが生まれないことになってしまいますが、ウマアリの場合は働きアリがオスを生み出します。ワーカー繁殖と言って、働きアリがn卵を産卵して雄を生産します。これを考えると、雄は何のために存在しているのかと考えさせられます。なぜなら、働きアリは一応雄アリの卵は産めますが、次世代を作る能力が著しく低いです。ダーウィン進化論によれば、次世代を産めないものはなかなか進化しえませんが、なぜこのようなことになったのかということです。更に複雑なことに、働きアリのn卵からも女王アリが出ます。なので、これもクローン繁殖です。これですと遺伝的多様性がとても低いですね。例えば、これで近隣で近縁の血族と繁栄していくと、多様性が低いです。そこで、遺伝的多様性を確保するために、別系統の雄と交尾をしなくてはなりません。ウマアリの生存戦略は、雄の存在価値が著しく低く、女王アリと働きアリが優先的に社会構造を決定しているということになります。

最後に、若者へのメッセージですが、今生物学などアメリカが主流になっているようにみえます。しかし、ドイツやフランスなどには柔軟な学問体系があるので、いろんな視点で勉強してほしいです。日本人は変わったことをするのが好きな民族なので、そういった興味は継続していきましょう。

（聞き手：江口久美）



Insectes Sociaux



ウマアリ（出典：[http://www.antwiki.org/wiki/images/8/88/Cataglyphis\\_velox\\_queens\\_Peeters.jpg](http://www.antwiki.org/wiki/images/8/88/Cataglyphis_velox_queens_Peeters.jpg)）

L'ECHANGE

生活

VIE

# フランスの幼稚園と小学校

パリに来て2年が経ち、2歳と4歳だった2人の子供も今ではそれぞれ公立の幼稚園と小学校に通っています。日本とフランスの教育システムの相違点については、書籍やインターネットに情報がありますので事前に調べてはいましたが、それでもフランスの幼稚園と小学校に実際に子供を通わせていると、日本との違いに驚きや戸惑いを感じることも多くありました。そこで、ここでは日本とフランスの学校教育の違いについて、私の家族が現地で経験してとても驚いたことをいくつか取り上げて紹介したいと思います。

最初は、“入園式や入学式などの式典がない”ことです。これは初めて子供を学校に連れて行ったときに知りました。当然あると考えていた式典が一切なく、日本ではよく見られる記念撮影もほとんど見かけませんでした。また、学校側も入学を祝うための装飾などはせず、初登校であっても通常通り淡々と各自の教室に入っていくだけでした。教室には両親も入るのですが、幾つかの書類確認を済ませたら10分ほどで両親だけ退出します。あまりにもシンプルな初日でしたので、書類確認後に「本当に帰っていいのか？」と何度も確認したことを思い出します。入学式だけではなく、始業式、終業式、卒業式などありません。

次は、小学校の授業についてです。日本の公立小学校では、学習指導要領に基づいて出版社が作成した教科書の中から、教育委員会が学校で使用する教科書を決定します。つまり、教科書の採択は、学校の設置者である各市町村の教育委員会に権限があります。一方、私の息子が通うパリ市内の公立小学校では、各教育職員がそれぞれのクラスで使用する教科書を選定しており、同学年でもクラスにより使用する教科書が異なっています。そのため、教科書の選定には教員の考えが強く反映されており、あるクラスでは絵が多く子供にもわかり易い教科書を使っているが、その隣のクラスでは文字が多く内容もかたい教科書を使っています。また、教科書の採択だけではなく、課外活動も各教育職員の考えにより大きく変わります。例えば、スポーツです。パリの公立小学校の多くは、スポーツをするのに十分な広さの運動場を持っていません。そこで、課外活動として少し離れた場所にある運動場へ行き、陸上などのスポーツをさせることがあります。ところが、ある教育職員は、この運動場までの移動時間が無駄な時間であるとして、課外活動をせずに学校での文化活動に置き換えてしまいました。そのため、所謂“先生の当たり外れの差”が日本よりも大きいかもしれません。

これらの他にも、フランスでは幼稚園でも通知表を渡される、給食は前菜、メイン、デザートのコースメニューで構成されるなど、まだまだ日本とは違う点がたくさんあります。ここで紹介した内容は私の住む地域だけでの特異な事例なのか、それともフランス全土で共通して見られることなのかは分かりませんが、日本とは違う学校教育を身近に感じつつ、これからも色々な驚きを見つけていきたいと思っています。

(文責：羽田明生)



写真：  
パリ 16 区の公立小学校

Special

Vie

Urban

Culture

Scène

Cuisine

フォー＝ラ＝  
モンターニュ  
Faux la  
Montagne

L'ECHANGE  
都市  
URBAIN

Visite

2017年12月。Éco-quartierの調査のため、フランス中部に位置する自治体、Faux-la-Montagneを訪問する機会があった。最寄りの比較的大きな街Limogesから車で40分以上。過疎中の過疎と書いていい自治体だが、近年都市からの移住者を惹きつけ、人口が増加。405人の人口のうち、幼稚園児・小学生が52人に上るといふ、寂れた感じのしない、むしろ活気を感じさせる自治体であった。なぜ都市からの人を惹きつけたのか。その詳細は別の機会に譲るとして、今回はその訪問記を紹介することとしたい。

### 1. スピード違反

パン屋、薬局、レストラン、カフェ、食料品店。必要な店は中心部にあり困ることのない所（必要最低限のものを保証することが都市から人を惹きつけるコツ。これは自治体の長の談。お店の壁を自治体の所有にして、経営者の高齢でお店が閉まることになっても、自治体が責任を持って次の所有者を探すシステムにしているとのこと）だが、バスの便のない所。訪れるためには車が必須。レンタカーを借りて、Faux-la-Montagneを目指した。途中、いきなりシャッター音が聞こえる。後日、スピード違反の通知書が送られてきた。70キロ制限の道を76キロで走行していたとの指摘。許容速度オーバーは71キロ迄とのこと。罰金は15日以内に払えば45ユーロ。その後は68ユーロに上がり、45日経っても払わない場合は180ユーロにまで上がるシステム。大人しく45ユーロ払う（後日談）。

## Faux-la-Montagne 訪問記 Visite de Faux-la-Montagne

### 2. 自治体の長とのインタビュー、中心部の散策

メールでインタビューを依頼。快く応じて頂いた。過疎からの脱出という意味で注目を集めている自治体。交通の便の悪い土地柄に関わらず、フランス全土から数多くの訪問者があるという。訪問者が多いことでマイナスの面はないのかと質問すると、マイナス面はあるが、外からの人を受け入れ続けられない限り衰退してしまう。外からの人を受け入れ続けるためにも、戸を開いておく必要があるとのこと。日本からの訪問者からということで、地域の新聞記者の方も同席。自治体としての工夫、問題点、将来展望など話を伺う。インタビューの後は、案内してもらい、中心部の散策（写真1）。



小さなオフィスが同じ建物内に多数（写真2）。住宅建設に際してのエココンサルティングの専門家、映画監督、都市計画コンサルティング etc. 小さい集落なのに、生活している人の多様性が目を引く。聞いてみると405人の人口なのに、30あまりのNPOが、文化イベント、保育園の運営、子供の遊び場の提供、テレビ局の運営などを行っているとのこと。外部から来た住民と古くからの住民との間に対立はないのかという問いには、実際問題溝はある。ただ、溝を埋めるための取り組みを模索している。成功例として、アーティストが村人の肖像画の作成と村人からのライフストーリーの聞き取りをした事例を紹介される。（地元のテレビ局によって映像作品化された肖像画事業→ <https://telemillevaches.net/videos/portraits-dhabitants/>）

### 3. 夕食への招待、スーダンからの難民

インタビューは午後13時半に始まり、色々案内して頂いているうちに早くも時計は17時半を指している。うちで夕食をどう？と自治体の長の方に招待して頂いた。19時半、お土産に持参していた日本酒を片手に長の方の自宅を訪問。長の方（女性）とその旦那さん。長の方の家庭が受け入れているスーダンからの難民の青年2人を交えての夕食。青年2人は徒歩でスーダンからアルジェリアへ。小さな小舟で地中海を渡りイタリアに至ったのだという。フランスとイタリアで難民の押し付け合いがあり、フランスとイタリアを行ったり来たりしているうちに、難民支援のNGOから保護され、長の方の家族が受け入れを決めたのだという。フランス語、フランス文化について今学んでいるところとか。村の話、日本の話、スーダンの話。夜は更けていく。

### 4. Éco-Quartier に民泊

Airbnb を用いて、Éco-quartier 内のお宅に民泊する（写真3）。家主がヴァカンスで不在のため、家一軒丸々お借りすることになる。2泊で80ユーロ弱。家主がエコに関しての専門家なため、家の中で様々な工夫が見られる。断熱が完璧なのはもちろんのこと、シャワーでは使った水の量が表示され（写真4）、トイレの手洗い場は、使った水がそのまま小便器に流れ込む仕組みになっている（写真5）。この冬、フランスは曇り空のことが多かった。今回の訪問中もほとんどが曇天。明日晴れますようにと折りながらベッドに。夜、トイレに起きふと窓の外を見ると満天の星空。バルコニーに出て空を見上げる。周りに遮るものがないので、まるで星空に包まれているかのよう。流れ星がちらほら。また来たいな。そう思った。

### 訪問の案内

森の美しさ、近くに湖があることから夏の行楽地になっている。キャンプ場や、宿泊施設も整備済。（自治体のHPから。宿泊施設の案内。→ <http://fauxlamontagne.fr/hebergements-faux-la-montagne/>）

（文責・高田祐輔）



左上から順に、写真2、3、4、5



# 日仏のインディゴ

つい最近、2月8日のフランス国立公文書館（Archives National）のFacebookの記事は、18世紀の染色史料に関するものでした。公文書館（le site de Pierrefitte-sur-Seine）では史料群F/12/553の中に、トゥールーズやリムーザンのマニュファクチュアが残した染色見本が多数おさめられているようです。ぜひFacebookで見たいんですが、スペイン向けに黄色や赤・緑に染色された羊毛や、リムーザンの花柄見本などはとても綺麗です。Facebookに登載された史料からは染色方法は判別つきませんが、おそらく天然染料によるものでしょう。

ところで、家業が染織をやっていることもあって、その現場に立ち会うことが少なからずあります。昨年の夏にはフランスの染織の歴史家である Dominique Cardon 氏と沖縄の琉球藍の製造所に行きました（写真1）。彼女は長年 CNRS で研究を重ね、その成果が Le monde des teintures naturelles という 700 ページを超える大著におさめられています。その題名が示す通り、世界中の天然染色を扱っており、インディゴや茜やコチニールなどなど世界中の植物・動物由来の染色の歴史・材料や技法に関して詳細に記し、それはテキスタイルにまつわる人間の営みの一大パノラマであり、布地を染めるということがいかに人類にとって普遍的な願望であり事業であるのかを示しています。中でもインディゴによる染めは日本でも「藍染め」としてよく知られていますが、フランスでも古くから使われていた染色方法で、フランスではウォードというアブラナ科の植物を用いて藍染めをします。ドミニクさんが出した最新の文献 The Dyer's Handbook では、そのウォードにインド藍を足して染色する方法が 18 世紀には確立されていたことが書かれています。ところで、僕が研究している 18 世紀のボルドーではインディゴは大西洋航路の重要な輸入産品でしたが、おそらくインド方面からインド藍を輸入していたのでしょう。ウォードは植物のなかに含まれている藍の色素量が少ないので、インド藍の色素を加えることでより濃い藍色に染まります。フランスは濃い藍色を得るためにも交易路を活用し、そこには大きな価値があったということになります。その方法を母の角寿子が実践していますが（写真2）、その青は日本の蓼藍や琉球藍による藍染ともまた違った、明るく艶のある藍色をしています。

沖縄ではドミニクさんも琉球藍製造所で、実際に製造工程に関わり、日本の研究者や染織家らとも交流を持ち、さながらインディゴの日仏交流となりました。宮古島では宮古上布の製造所にもいきました。宮古上布は 14 世紀ごろから伝わる藍染の織物で、中国大陸にも伝わった琉球王国の献上品です。ドミニクさんはその歴史を伝えるビデオを興味深く見ながら、そこに写る古文書は何なのか質問していました。彼女によるインディゴの世界パノラマの中にまた新しい 1 ページが加わったことでしょう。

（文責：角玲緒那）

写真1（左）：  
琉球藍製造所でのドミニクさん  
ら（筆者撮影）

写真2（右）：  
左2カセがウォードのみ、中央  
がウォード+インド藍、右2カ  
セが蓼藍（角寿子）



# クロード・ロランと ピクチャレスク

筆者は政治学を専攻する博士課程の学生である。先日、参加民主主義に関する研究の一環で3週間程フランスを訪れる機会があった。パリ政治学院のコリン・ヘイ先生と議論したり、地区評議会による景観まちづくりを視察したりするなど、大変充実したものであった。様々な活動を盛り込んだ渡仏だったが、中でも思い出に残っているものの1つがルーブル美術館への訪問であった。

ミーハーな私は、「ミロのビーナス」、「サモトラケのニケ」、「モナリザ」、「シャルル7世の戴冠式のジャンヌ・ダルク」、「民衆を導く自由の女神」などワクワクしながら有名どころを鑑賞していった。だいたい見たいものを制覇して満足した私は、芸術の才能がからっきしなのもあって、その後はてくてくと何の気なしに見て回る程度であった。

ところが、北ヨーロッパ絵画コーナーに移ったときふと目に止まるものがあった。言葉に表すことができないが、風景に圧倒されるというか、おそらく現実にはありはしない光景なのだろうが、とても心地よい色使いと配置なのである。画家の名を確認すると Claude GELLÉE, dit Claude LORRAIN (1602-1682) とあった

帰国してからもなぜか GELLÉE のことが頭にちらついていたので気になって詳しく調べてみることにした。そして以下のことがわかった。

クロード・ロラン、本名はクロード・ジュレ、ロランはロレーヌ地方出身だったのでこのように呼ばれていたようである。1600年代、フランス古典主義を代表する有名な画家であった。風景画を得意とし、現実にはない理想の風景を描くことで知られている(1)。ルーブル美術館には、「タルスに上陸するクレオパトラのいる風景」や「クリュセイスを父親のもとへ送り届けるオデュッセウスのいる港の風景」(図1)が展示されている。

ロランは17世紀のフランス人画家で人生の大半をローマで過ごしたが、実はその絵画が大きく賞賛されたのは海を隔てたイギリス、しかも18世紀から19世紀にかけてであった。18・19世紀のイギリスでは、幾何学的な庭園図式や合理的な工業主義的風景に対抗する理想として、ロランの不規則的な風景画が参照されていた(2)。

図1：  
Ulysse remet Chrysis à son père ( 出典：Bernard Biard, La Peinture de Paysage: et son Influence, des Origines au XVIIe Siècle, (GEOGES NAEF, 2013), p.139.)



L'ECHANGE

風景

## SCÈNE

Spécial

Vie

Urban

Culture

Scène

Cuisine

参考文献：

- (1) 小針由紀隆『クロード・ロラン』論創社、2018年。
- (2) 江口久美『パリの歴史的建造物保全』中央公論美術出版、2015年、54頁。
- (3) 同上。
- (4) 同上、46-47頁。
- (5) 高山宏『庭の綺想学——近代西欧とピクチャレスク美学』288-289頁。
- (6) 同上、309頁。
- (7) 同上。
- (8) 小針由紀隆『ローマが風景になったとき——西欧近代風景画の誕生』春秋社、2010年、29頁。
- (9) 宮台真司『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』幻冬舎、2014年、267-268、394頁。
- (10) 宮台真司『正義から享楽へ——映画は近代の幻を暴く』境内出版株式会社、2017年、57-59頁。
- (11) 宮台真司『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』幻冬舎、2014年、131-132頁。
- (12) ヴァルター・ベンヤミン『図説 写真小史』久保哲司編訳、筑摩書房、1998年、36頁。
- (13) 同上。
- (14) チャールズ・テイラー『〈ほんもの〉という倫理——近代とその不安』田中智彦訳、産業図書、2004年。
- (15) 宮台真司・義原敬『まちづくりの哲学——都市計画が語らなかつた「場所」と「世界」』ミネルヴァ書房、2016年、90-92、110-111頁。

個人的に最も興味を惹かれたのが、イギリス人がロランの絵画を形容するときの表現である。江口久美『パリの歴史的建造物保全』によれば、イギリスの人々はロランの絵画を見て、ピクチャレスクであると称賛していたという(3)。ピクチャレスクとは、景色が良い、見え方が感動的であるという概念である(4)。なるほど、息の詰まるような合理的な風景に対して、うまく言えないが感動的な風景の方が好ましいのではないか、そのことを何とか表現しようとして生み出されたのがピクチャレスクという形容詞だったのだろう。

そもそもピクチャレスクという不思議な視覚文化がイギリスで流行した原初は、裕福な貴族子弟による大陸周遊グランドツアーにあるという(5)。彼らは、イタリアを目指すアルプス越えツアーに参加する中で雄大な自然に触れ、ピクチャレスク的な美学に目覚めた(6)。そんな彼らがクロード狩りと称してロランの絵画を買い付けイギリスに送っていた(7)、というも頷ける話である。ロランの絵からは、「自然の多様な容態に対する尽きることのない興味、自然の活力に直接触れることへのこの上ない喜び、輝かしい光の効果に対する鋭敏な感受性、量のある陰影をたくみに配分していくバランス感覚」(8)が感取できるのだ。

ピクチャレスク研究を読む中で、社会学者、宮台真司の使用する〈主知主義〉と〈主意主義〉の区分が頭によぎった。宮台によれば、〈主知主義〉は人間の理性に信頼を置くのに対し、〈主意主義〉は人間の理性に限界を見出し、感情や意志に重きを置く立場である(9)。言語的なもので物事を説明しようとする立場と非言語的な感性を重視する立場の区分とも言える(10)。

この区分を使うと、ピクチャレスク現象は以下のように説明できる。近代化、工業化によって整備された〈主知主義〉的な風景に対し、〈主意主義〉者は名状しがたい拒絶感を抱く。彼らは感性によって知覚される、言葉にはしがたい理想の風景を胸に抱いていたからだ。しかしながら、〈主知主義〉者を説得するには、理性的な討議という同じ土台に立たなければならない。そこで何とかして生み出された言葉がピクチャレスクだったのだ。

確かに、言葉を越えた神性、超越した何かの力がロランの絵画には降りているように感じた。ロランの絵はとにかく「すごい」のだ。筆者はロランの絵に、宮台の言うアウラを感じた。アウラは、降臨した神聖、「ここにはない本物が宿っている」という感覚を表す言葉だ(11)。宮台の引用元であるヴァルター・ベンヤミンはアウラを「空間と時間の織りなす不可思議な織物」(12)と説明している。同種のものが存在しない1回性的なものにアウラは現れる(13)。他のものが存在しない強烈なオリジナリティという意味では、チャールズ・テイラーの言うほんもの(Authenticity)の概念に近いかもしれない(14)。

アウラを持つロランの絵画がピクチャレスクによるまちづくりに発展していったのも頷ける。宮台と義原敬のまちづくり対談で、人間のスケールを越えた計算不可能性の重要性について語られている(15)、ピクチャレスク的な美学には、そのような合理性だけでは描けない理想、言い換えれば、我々が暮らす社会よりも、複雑かつ雄大な世界の視点、を導き出すヒントが詰まっているのだ。ピクチャレスク運動に代表される感性的な風景を重視する傾向は18・19世紀に見られたものである。しかし、ワークショップ的な言語による理性的討議を重視するまちづくりが主流となっている現代日本においてこそ、ピクチャレスク的な視点が重要なのではないだろうか。人の心を揺さぶる感動的な風景はそういうところから生まれてくるのだから。

ロランについて色々調べた中で、このように言語と風景に関する様々な知識が得られるとは思わなかった。美術の成績が悪く、芸術的才能のなさ強く自覚していた筆者だが、フランスの偉大な画家のおかげで、自分にも芸術に対する興味があることに気づけたのは僥倖だった。機会を作って是非またルーブル美術館に訪れてみたいと思った。あの広大な芸術群の中から次ほどのような出会いが生まれるのだろうか。今から楽しみである。

(文責：徳永翔太)

# じゃがいも

**街** なかで、屈強な男の人が金属パイプを持っているのを見かけたらひやっとするかもしれませんが、それがフランスの比較的人通りが多い場所だったら、おやっと身を乗り出すでしょう。翌朝そこに市場が立つしるしです。朝市の前日にはパイプを山と積んだトラックが道路や広場にやってきて、予め埋め込まれた穴の列に一本ずつ縦棒が収まり、間をつなぐよう渡された横棒の上には丸まったシートが乗せられます。広がって屋根になるのは日が昇る前です。

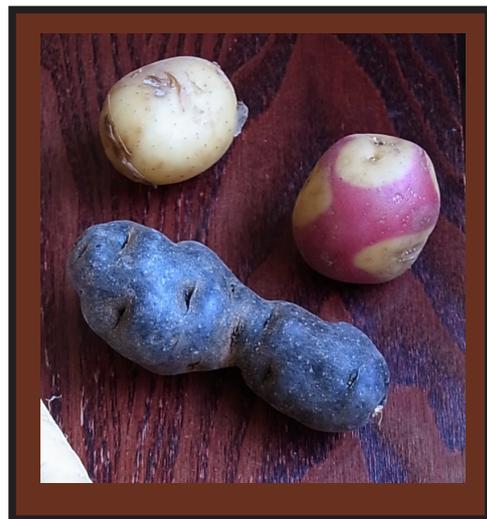
**市** 場には野菜果物、きのこ、チーズ、魚介類、鶏肉、豚肉とお惣菜、牛肉、ジビエ、パン、オリーブ、乾燥フルーツなどさまざまな店があり、通常営業の店ではあまり見かけないものも出てきます。なかでもトマト専門店やリンゴ専門店は赤や黄の鮮やかな色合いで目を惹きますが、今回は幅広い土色の階調を繰り広げるじゃがいも専門店のをぞいてみましょう。ここには二十種類以上のじゃがいもが、ときに異国風の名前を冠して並び、通りかかる人を魅了します。アマンディーヌ、シャルロット、モナリザといったお馴染みの面々は日々欠かせないけれど、少し特別な気持ちで、今や世界に知られたこの野菜そのものの味をじっくり味わいたい、というときにはこの「じゃがいもバー」で高品質のものを見つけることができます。種類によって色や形、肌触り、もちろん触感と味も異なるので、どれも試してみたいところです。

**た** とえば「ヴィトゥロット・ノワール」は1812年にはすでに知られていた古い種で（写真手前）、皮だけでなく中身も真紫、味は濃厚なじゃがいもです。ご存知のように、フランスではアントワヌ・パルマンチエ（1737 - 1813）が食糧不足対策として18世紀にじゃがいも導入を促進し、それ以来品種も増え現在224種（欧州委員会品種データベース）に上りますが、「ヤマウズラの目」もポップな色合いながら伝統種のひとつです（写真右奥）。目玉をごろごろ煮て食べると連想するとグロテスクですが、この薄紅色は目のごちそう。ついでながら、フランス語でじゃがいもの芽は「目」と呼ばれます。

**と** ころで、詩人のフランシス・ポンジュは、「質の良いゆでたじゃがいもの皮を剥くことは極上のよろこびだ」と讃えます。「親指の腹と同じ手の他の指に支えられたナイフの先との間に一切込みを入れたあと一傷口の片方のめくれからこのざらざらした薄い紙をつまみ、手前に引いてこの塊茎のおいしそうなお身からはがす。」この簡単な作業は、感触がよく音も耳に快い。むき身の完璧さにおいては「なにかしら公正なもの、自然によって長らく準備され望まれていたものが成し遂げられたように思われる、ただしその仕上げをさせてもらったのは人である」。この詩「じゃがいも」は、戦時下の1941年に書かれたが、食糧としてではないじゃがいもの在り方をとらえようとしています。

**落** ち込んだとき、うつむいて歩くことも悪いことではなさそうです。アスファルトに直径五センチほどの輪が並んでいるのに気付いたら、そこに立つ市場の活況が思い浮かび、うまく気が逸らされることもあるでしょう。

（文責・綾部麻美）



# 編集 後記

L' Echange

日仏工業技術会では新規会員を募集しています  
趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等を問わず歓迎です。  
下記 HP の「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入の上、本会事務局までお送りください。  
<http://www.sfjti.org/about/admission/>  
お気軽に下記メールか電話でお問い合わせください。



江口久美 九大・決断科学センター  
Kumi EGUCHI

やっと第六号が完成しました。今回は、近年のヒアリ騒動で脚光を浴びた村上貴弘先生へのインタビューを敢行させていただきました。先生、お忙しい中、お時間をお取りいただき大変ありがとうございます。編集特派員も随時募集していますので、お気軽にご連絡ください。



高田祐輔  
Yusuke TAKATA

2017年パリ東大学都市計画学校修士課程修了。現在は文化によるまちづくり現場と、大パリ計画を始めとする都市再開発現場のガイドを行いつつ、まちづくりへの住民の自発的な参加を後押しする仕組みづくりを模索中。趣味は、フランスのダンスパーティ空間の変遷について、調査、学習、再現を行うこと。



綾部麻美 慶應義塾大学 仏文学  
Mami AYABE

左の写真で下にあるのがフランスで遭遇したじゃがいも型のお菓子です。しっかりねっとりとしたじゃがいも入り生地の塊がココアの土をささもさと纏い、アーモンド片の芽を生やしています。珍種。



羽田明生 鉄道総研  
Akio HADA

白アスパラガスは欧州の春の訪れを告げる食材の1つですが、最近、近所のマルシェでも見かけるようになりました。マルシェでは旬の食材が多く売られていますが、それらを通して季節感を感じることも現地での生活の楽しみとなっています。



徳永翔太 九州大学  
Shota TOKUNAGA

今回初めて投稿させていただきました。編集の方、執筆の機会をいただきありがとうございます。おかげさまで、クロード・ロランを通してフランス文化の奥深さを学ぶことができました。



角玲緒那 九州大学  
Reona SUMI

フランス国旗の青と赤は元は何の色だったのでしょうか。藍と茜でしょうか。僕にとつてのフランスの青と赤というと、アンジェのアポカリプスのタピストリーを思い出します。中世から伝わる全長100メートルほどの黙示録の物語は青と赤が鮮やかです。是非見についてみてください。

sfjti  
日仏工業技術会

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生（東京大学名誉教授）が、1955年フランス大使館文化部（1969年独立して現在フランス大使館科学技術部）参事官（当時）C.d'Aumale氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】  
150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内  
Tel 03-5424-1146 Fax 03-5424-1147  
E-mail: info@sfjti.org  
HP: <http://www.sfjti.org/>



【交通アクセス】  
JR 山手線：恵比寿駅東口下車 恵比寿ガーデンプレイス方面へ 徒歩 10分  
営団地下鉄・日比谷線：恵比寿駅1番出口 アトレ・JR 恵比寿駅東口を經由 徒歩 12分

## 日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て1955（昭和30）年に設立され、日本とフランスの工業技術の紹介と普及および両国の技術者の交流促進を目的として活動してきました。日仏両国と深い関係にある企業や研究機関、内外の最新知識を求める技術者、研究者、学生に加入していただき、日仏会館参加の学会の一つとして、最新の有益な情報を会員の皆様に提供しています。

フランスは芸術やファッションと食文化の国として知られていますが、同時に科学や産業技術の面でも最先端を行く国の一つです。フランスの優れた科学技術を知るために、日仏工業技術会はいくつかの専門委員会を置くとともに、「建築・都市計画」「鉄道・交通」「原子力」「情報通信」などの分野の最新テーマを選び、両国の専門家によるシンポジウムやフォーラムを開催して、日仏間の情報の架け橋となってきました。

年二回発行する「日仏工業技術」誌は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「先端医療技術」、「水素エネルギー」、「繊維が紡ぐ日仏交流」、「木質建築の現在と未来」「都市鉄道の近未来」など、様々な切り口で毎号に特集を組み、底流になる日仏の文化の差異なども紹介しています。創刊60周年記念特別号「現代科学を問い直す」は、科学技術のあり方の根源を求めて2016年に開催した連続講演会の内容を掲載しています。また、フリーペーパー『L'Echange』は若手研究者が編集し、最新のフランス情報を提供しています。

また、毎年秋には、在日フランス商工会議所の会員とともに、富岡製糸場、海洋研究開発機構、神奈川県立がんセンター、キッコーマン野田工場など、先端技術の現場や日仏交流の遺産などの見学会を開催しています。

一人でも多くの方が入会されて、日仏交流の活動に参加してくださいませよう、心からお待ちしています。

日仏工業技術会会長 菅 建彦



写真左よりシンポジウムの風景、資生堂研究所見学の際の集合写真、会誌の表紙例

## 入会申込書

入会申込日： 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員 (5 千円/年) 学生会員 (2 千円/年) (○で囲んでください) (いずれも入会金は無)
氏名	ふりがな： 漢字表記： 印 英語表記：
生年月日	西暦 年 月 日生
勤務先・在学先 (部署・学科まで)	
勤務先住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
自宅住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
会誌送付先	勤務先・在学先 自宅 (○で囲んでください)
学歴	大学 学部 学科 年卒業・見込 大学 研究科 専攻 修士課程 年修了・在籍中 博士課程 年修了・在籍中
専門	
通信欄	

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会

TEL: 03-5424-1146 FAX: 03-5424-1147 e-mail: info@sfjti.org

振込先: みずほ銀行 恵比寿支店 恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506

三井住友銀行 神田支店 普通 0321637